珠 洲 だ よ り

2025 年度　第４号

雪の日の見附島

巻頭言　～～　寄り添い続ける　～～

珠洲市災害支援　現地責任者　福井　康江

寄り添い続ける、震災から２年を迎えた１月３日の北國新聞記事の見出しが、この言葉で飾られていた。これは、被災遺族の家族の方が「大切な人を亡くした悲しみを抱える方に『あなたと一緒に乗り越えるよ』と寄り添いたい」と話された言葉を基にしていた。

報道によれば、2025 年 12 月末時点で、能登半島地震の直接死は２２８人、災害関連死は４７０人、行方不明者２人、令和６年の奥能登豪雨災害では関連死を含め２０人が亡くなっている。

被災者の状況としては、また約１万８千人が応急仮設住宅で暮らしている。全半壊した家屋の公費解体はほぼ完了したが、奥能登４市町では危惧されていた人口減少が進み、震災後 7,302 人減少しており、内転出が約 7,000 人に及んでいる。

人口の減少は、保健医療福祉分野でも直結する大きな問題となることを、身をもって感じている。特にこの１年は、できることややれる限界の壁に身動きが取れなくなる感覚を何度も感じてきた。現地の支援者の方々も、同じように感じたことが何度となくあったのではないだろうか。

「寄り添い続ける」ことは、決して簡単なことではない。しかし、この言葉を失くすことはできない。「足るを知る」、そうした謙虚な能登の面持ちの暮らしを、尊厳を損なわず人としての生き方を守り抜くためには、つながりや創造力、知恵を合わせることが今年は更に重要になり、復興に向けての正念場となってくるだろう。

§活　動　報　告§

１，活動を終えて

医療法人協和会　第二協立病院
岡本　みゆき

今回 10/20～10/24 の５日間珠洲市での活動を行いました。私は発災後、初めて珠洲市を訪問した。

発災から１年半以上も経過している中で、まだまだ解体作業があちこちで行われており、時間がかかる現状を目の当たりにしました。活動は、ささえ愛センターの方々と仮設住宅やお家に訪問した。何度も地域の訪問を繰り返し行い、不在の場合もまた後日訪問されていました。訪問したところでは、いろいろなお話を聞かせていただきました。家の改修、ご家族の状況、ご近所の方々のことなど時間が過ぎたからこそお話しいただけるようなお話もありました。

ソーシャルワーカーとして自分ができることは少ないかもしれませんが、支援の展開をどうしていくのか考えることや、各団体との連携など学び、経験させていただきました。本当に皆様にお世話になり、ありがとうございました。

訪問時の車と珠洲外浦の風景

団地住民の方とラジオ体操！

２，　現地で学ぶということ

日本医療ソーシャルワーカー協会
事務局　井川　亜里沙

私は日本医療ソーシャルワーカー協会　事務局にて石川県珠洲市被災地支援活動の後方として、派遣登録者への連絡等を担当しております。今回、実際に現地の状況や事務運用上必要な情報収集のため、現地へ伺う機会を得ました。

珠洲市ささえ愛センターの一角に日本医療ソーシャルワーカー協会のデスクがあり、日々ささえ愛センターの職員と情報を共有しながら、仮設住宅を訪問、ときにはサロン活動に参加し、レクリエーションを通して地域の皆さんと交流する機会が得られた。

活動を通して感じたことは、現地のことは現地でしか分からない、という感覚。

珠洲市ささえ愛センターの職員の方と、健康調査（ローラー調査）に同行させてもらう中で、珠洲市

内のあちこちを見て回ることができ、被害が大きかった地域、2024 年８月豪雨の被害なども教えていただいた。住宅への被害だけでなく、珠洲市内で唯一のショッピングセンターであった「シーサイド」のすぐ近くの駐車場では地盤沈下の影響で海水が侵食。「もともとは港や駐車場が向こうの方まであった」と聞いた。

山間エリアでは、地震により道路が波打った状態のままの場所や豪雨による土砂崩れが発生していた。案内をしてくださった職員の方から、「海水が侵食したり、道路が地面に飲み込まれたり、少しずつ自然に還っていくんだろうね」と仰っていた。その言葉からは自然災害を前に無力を感じる一方、その現状を受け入れようとしているのだとも感じた。

人の往来が少ない箇所は、応急的な修繕にとどまっている様子についても垣間見ることができ、報道等の情報では得られない見聞を得ることができた。

健康調査は３周目で、これまでの調査で対面できていない住宅の住民を対象としており、十数軒回って、たまたま帰宅した住民に出会える、といった状況であった。

出会えた住民の方には、聞き取り調査にとどまらず、地域住民の様子や、被災以降の健康課題に関することなど、様々なお話を伺うことができた。

とある住民からは、「以前は民宿を営んでいたが、敷地内にある土蔵が全壊判定となった。取り壊すにも重機が入れず、どうにもならない。民宿は廃業した。近所との交流も人がいなくなってほとんどない。ここですることがない。地域の人同士の交流ができる機会があるといい。」といったお話を伺った。地震をきっかけに生活が大きく変わる中、人を助けられるのはやはり人であり、交流、コミュニティなのではないか、と感じた。

地元の皆様の話し言葉からは温かみを感じ、たった５日間の活動ではありましたが、故郷に戻ったよう感覚であった。最終日には、終わってしまうのかと離れがたい気持ちとなっていました。今回の貴重な経験を事務局での業務にも活かしていきたいと思います。

２日連続で虹を見ました。
珠洲（能登半島）は良く雨が降り、
天気が変わることも多いそうです。

３．つながりを繋ぐ

石川県医療ソーシャルワーカー協会
中宮　久美子

（珠洲の秋空と紅葉）

2025 年 11 月６日（木）、快晴の珠洲市にて災害支援活動を行いました。 金沢近隣ではクマへの警戒が続く中、珠洲ではゆずや柿があちこちで実り、里山の豊かな秋を感じる穏やかな一日でした。（珠洲ではクマの出没がないそうです。）現地派遣の福井さんと行動を共にしました。主に単身高齢者のお宅を訪問しましたが、継続的な支援を行う福井さんは、すでに住民の方々と顔なじみとなられていました。訪問した多くの方々は、買い物にも不便なアクセスの悪い地域で、木造の大きな家に住まわれています。仮設住宅への支援に目が向けられがちですが、自宅で生活される単身の方々も孤立しやすく、継続的な支援を届ける必要性を改めて痛感しました。

また、当日は若山公民館でハンドパンとフルートのコンサートが開催され、多くの高齢者が参加されていました。幻想的な音色に触れ、参加者の表情が和らぐ様子が見られました。

コンサート後には、近くの若山小学校へ。地震で使用不能となっていたグラウンドに小スペースながら新たな場が設けられ、その完成記念として太鼓と子ども神輿がグラウンドと仮設住宅を練り歩く光景を目にしました。大谷小学校の運動会でも感じましたが、先生と生徒、保護者、地域の方々の温かいつながりを感じる瞬間でした。

被災された方々が孤立せず、人とのつながりを深めていけるよう支援していくことが、ソーシャルワーカーの重要な役割であると強く感じた一日でした。

４．被災者や日本協会の皆さんから学ぶ

石川県医療ソーシャルワーカー協会
園谷　準

2025 年４月から、月に１回程度、計７回災害支援活動を行いました。

主に現地責任者の福井さんと行動を共にしました。具体的な関わりとしては、珠洲市社会福祉協議会の見守り訪問相談員の方と一緒に生活に不安のある自宅や仮設住宅を訪問したり、仮設住宅にイベントのチラシを配ったり、記録整理などの事務作業も行っています。

印象的だったことは、被災者である皆さんが笑顔で応対してくださったり、労いの言葉を頂くことも多く、逆に自分自身が元気をもらっています。また継続的な支援を行う福井 SW は、すでに住民の方々と顔なじみとなっており、日々被災地や被災者に心を寄せながら関わってくださっている事を感じました。

自身の災害支援活動は、今の関わりでは出来ることが余りに少なく、活動のたびに無力さを痛感しています。訪問の中で、仮設住宅もいつか出ないといけないという不安をかかえており、「子供達からは珠洲を出るよう勧められているが、珠洲を出たくない。そう考えると夜も寝られない」との声を聞きました。しかし、そのような話を聴いても、何もできず胸の詰まる思いでした。

ただ皆さんが話してくれたことや表情やその姿を忘れずにいたいと思い、それが今後クライエントが困った時に自分の SW の力になるだろう、これからの災害支援活動にも役立つ事があるだろう、と思いました。今はまだ漠然とですが、そう感じています。

また、支援者でありながら被災者でもある現地の支援者の方々からも、沢山教えていただくことがあります。何より現地支援では、住民をアセスメントして訪問の頻度や必要性を明確にしてゆくこと、また、様々なところに気を配りながら地域との関係作りをしてゆくことなど、様々な支援の形を見させていただいています。

今後は日本協会の方々が築いてくれたバトンを引き継ぎ、県協会の一員として被災者の皆さんに継続的な支援を行っていきたいと思います。

§珠洲焼販売支援について§

桃山学院大学社会学部
平野　裕司

当協会で、2025 年 1 月より継続してきた「珠洲焼販売支援」が、このたび一区切りを迎えました。

本取組のきっかけは、珠洲市災害支援現地責任者である福井康江氏と一人の珠洲焼陶工との出会いでした。家屋の修繕について相談するため、福井氏がご自宅を訪ねた際、納屋等に多くの珠洲焼があるのを目にしたそうです。陶工の息子さんからは「こんな時に珠洲で珠洲焼を買ってくれる人もいないだろうし、販売するところも被災していて…親の面倒をみながら、手続き（被災に伴う）をするのでやっとだ。いずれは処分しなければならない。」と話したとのことでした。

その陶工の方は、度重なる災害により自宅および珠洲焼の窯が大きな被害を受け、仮設住宅での生活を余儀なくされていました。陶工の息子さんは当時を振り返ると、「窯の再建はもとより、自宅再建の目途も立たない状況の中で、親父は次第に口数も少なくなっていった」とのことでした。

その光景が、福井氏の心に強く残り、「処分ではなく、私たちにできることはないだろうか」と考えるようになったことが、本取組の出発点でした。

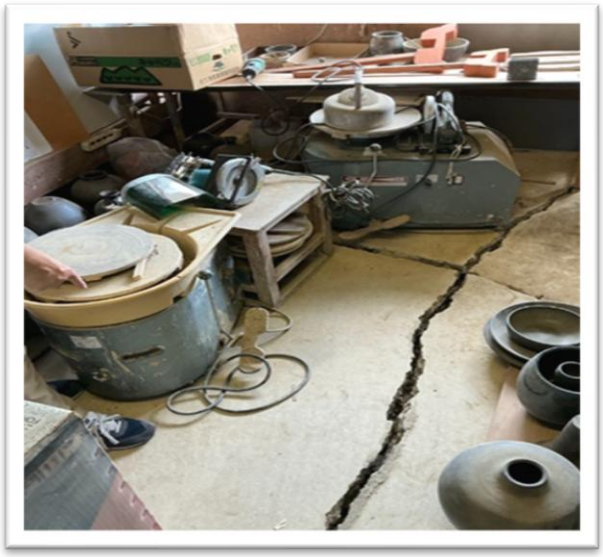
この話を受け、珠洲市災害支援現地統括である笹岡眞弓氏は、販売の可能性を模索し、さまざまな関係者に相談を重ねました。その結果、当協会をはじめとする職能団体が参加するソーシャルケアサービス研究協議会 2025 年新年賀詞交歓会（2025 年 1 月 23 日）において、初めての販売会を開催することができました。

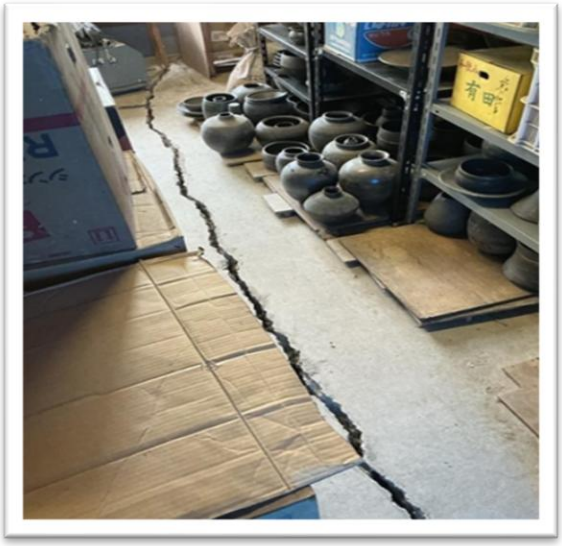
その後、豊島区長をはじめ多くの方々のご協力を得て、第 18 回としま MONO づくりメッセ（2025 年 2 月 27 日～3 月 1 日）、当協会第 73 回全国大会・第 45 回日本医療社会事業学会：三重県（2025 年 6 月 21 日～22 日）においても、珠洲焼の販売支援を継続して実施してきました。

さらに、当協会の活動を知った和泉市社会福祉協議会（大阪府）より、「社協のおまつり（主催：和泉市社会福祉協議会）」での販売支援のご提案をいただきました。当日（2025 年 11 月 8 日）は、桃山学院大学の学生 21 名が珠洲焼の販売を手伝い、あわせて、長年ボランティアとして活動されてきた方々への記念品として珠洲焼が贈呈されました。

これら一連の販売支援を通して、多くの方々に珠洲焼を手に取っていただき、温かいご支援を賜りました。そして私たちは、「ソーシャルワーカーは人の生活だけでなく、文化をも守る存在である」というメッセージを発信できたのではないかと感じています。

改めまして、本取組にご協力いただきましたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。





地震の被害を受けた陶工作業場

ソーシャルケアサービス研究協議会
2025 年　新年賀詞交換会（於：都内）
（2025 年 1 月 23 日）

第 18 回としま MONO づくりメッセ
（2025 年 2 月 27～3 月 1 日）

第 73 回全国大会（三重大会）
第 45 回日本医療社会事業学会
（2025 年 6 月 21～22 日）

社協のおまつり
〔主催：大阪府和泉市社会福祉協議会〕
（2025 年 11 月 8 日）

§イベント関係§

メンズサロン（10 月）
ランタン作り

メンズサロン（11 月）
ミニクリスマスツリー作り

メンズサロン（12 月）
年忘れ会
マジックショー、ビンゴ大会

市主催：オヤジずむ（12月）参加
男の料理教室　「冬の簡単おうちごはん」

12月　ほっと　カフェ
ささえ愛センターの支援者さんを
対象に開催しました！

～～　編　集　後　記　～～

今号は、５名の方から寄稿いただき、珠洲市での災害支援活動をそれぞれの視点で伝えてくださいました。一口に被災地支援と言っても、本当に幅広いものであると改めて実感しました。皆様、業務を抱えた中、本当にありがとうございました。

年末年始、能登から羽田までの移動の途中、美しい富士山を見ることができました。

多くの方々にとって良き年になること、復興が進んで行くこと、そんな希望を与えてくれました。

F